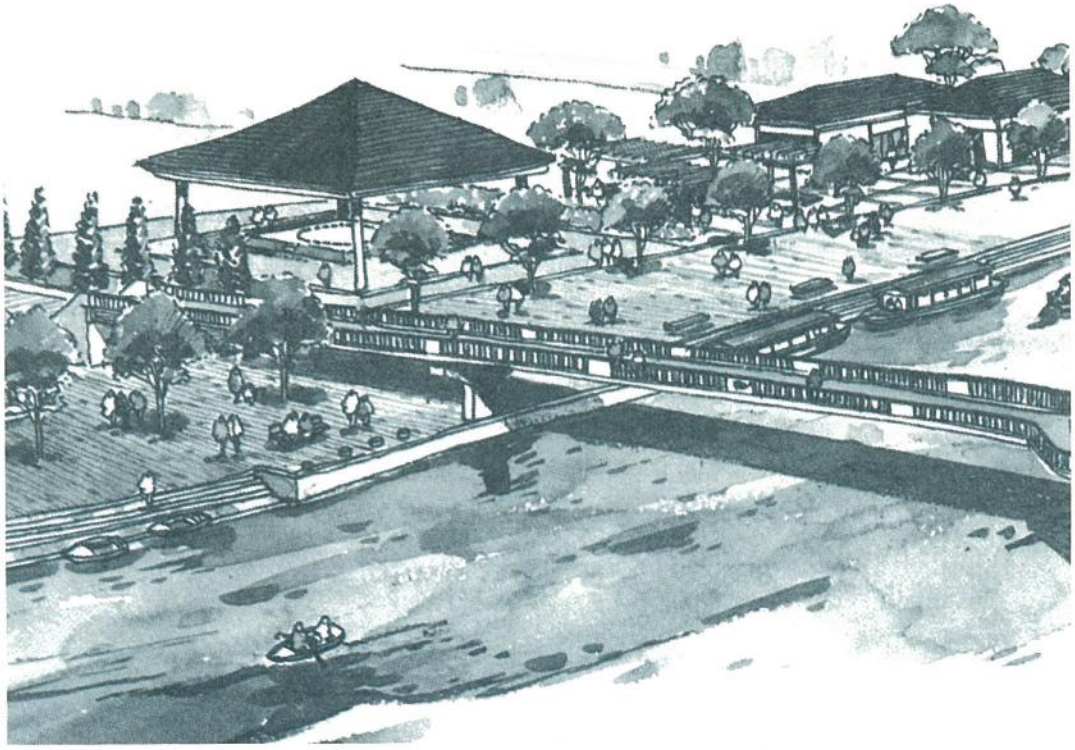
No. 40　　1990年3月1日

アルパック ニュースレター

地域計画・建築研究所



伏見港をよみがえらせる事業がすすみつつあります。
（本文「伏見港物語」で紹介しています）

アルパック　ニュースレター　もくじ

・デザイン博・その後（上）…… 2
・妄想の博物館（下）…… 4
・伏見港物語…… 6
・大阪事務所ＯＡ化奮闘記…… 8
・のり面開発の動き…… 10
・“Most Livable City”の意味するもの…… 11
・國境（美濃と近江）談義から…… 12
・新刊旧刊書評紹介…… 13
・まちかど…… 14

NO. 40

デザイン博・その後（上）

尾関　利勝

テーマが産んだ様々な反応

「名古屋でデザイン？冗談だろ」と、東京のある情報関係の専門家が言いました。

「デザインをテーマにしているのに、俺達にお呼びが懸からないのはどう言う事だ」と、地元のあるインテリア・デザイナーが言いました。

「デザイン博って、一体何をやるのか、さっぱり分からん」と大方の市民が言いました。３つの話はどれも今から２年程逆上ったころの話しです。三者三様の受け止めかたがあって、とても印象的でした。

そしておなじころ、行政に関係する人達や、多少各地の地方博を知っている人、そしてマスコミで、名古屋のデザイン博が成功するかしないか話題になっていました。

実はこの３つのパターンの意見をあちこちで聞いて、ひよっとするとこの博覧会は成功するのではないかと思い始めました。どうしてかと言いますと、開催前にもかかわらず、無関心と言うよりも、それぞれの立場でこの博覧会に何等かの反応を示していることがあちこちで感じられたからです。おそらく、ここで選ばれたテーマが、他の地方博に多かった、「未来」、「夢」、「情報」などであったとすると、特別の反応もなくさらっと受け止められていたのでしょう。名古屋があえて「デザイン」と言うテーマを選んだ結果、予期しなかった様々な反応を見ることが出来ました。最終的には主催者目標1,400万人の入場者予想を上回る1,518万人の入場者があったのですが、東京のあるマスコミは、デザイン博の成功と言う評判に対して「３会場だから1,500万人はインチキだ」とか、「小学生を動員した」とか、「各方面に入場券を押し付けた」とか言ってヒステリックに騒ぎ立てたそうです。このように、博覧会が終わってからも北海道のような悲惨な話題とはちょっと違いますが、成功したことへの拒絶反応としての話題を提供した点でも、インパクトのあった博覧会でした。結果としてこのテーマは、市町村制の施行を記念する月並な博覧会が多い中で、反応の内容の多様さ、特殊性を含めて博覧会時代の地方博に大きなインパクトを与えたという感想を持ちました。地方博もいよいよテーマ型の時代になったと思います。

入場者数を競い合う地方博・マスコミ

「1,500万人なんてインチキだ」という声の視点はあながち間違っている事ではありません。当初、主催者は５～600万人を考えていたようでしたが、間際になって困った問題がおきて来ました。会場が３つに分散している中で、どう入場者をカウントしたら良いかと言うことです。結果的には３会場合計と決め、様々な観点から合計1,400万人を目標としたと言う事でした。つまり名古屋の場合は市内に３つ会場が分散していることが特色であり、そこから起きた入場者カウント方法の問題だった訳です。東京のマスコミが非難したように３会場で水増ししようと言う魂胆があった訳ではないのです。類似例として奈良のシルクロード博があり、この入場者、特に第二会場が惨たんたるものだったとの評判から、またまた各地の方々から名古屋は成功しないだ

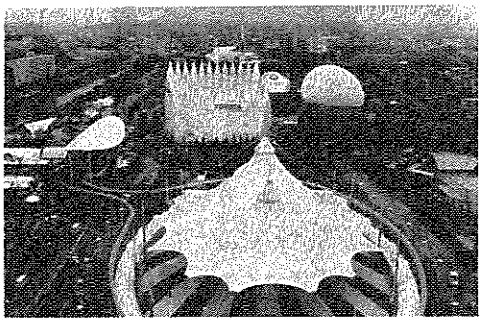
ろうと言う事前評価を頂だいしていました。

当時、この地方で直前に開催された岐阜未来博が400万人を超え、福岡のよかとぴあが600万人、横浜博が1,400万人を予想と公表されていましたから、これらの目標値が主催者に影響を与えなかったとは言い切れません。

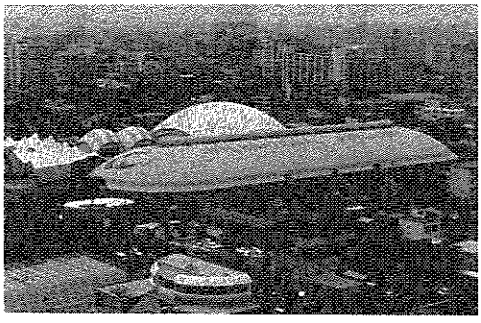
こうしたイベントには事業採算を含めて入場者数が大きな意味を持っています。言わば事業経営や営業的視点からは当然の事でしょうし、会場運営や防災・安全管理面からも必要な事です。しかし結果的に数字が一人歩きし、それだけが評価の対象にされてしまうことが問題です。デザイン博でも、地元マスコミによる事前の前売り券割り当てや小学生の動員と言った記事がかなり目につきました。これらの記事を見ますとそれらの社会的影響が大きいだけに、マスコミも単なるジャーナリスティックな視点からもう一歩踏み込んだ視点がほしいなあと思いました。小学生を「動員」と見る発想は、実に寂しい限りで、比較的会場の空いている初期の平日に市内の小学生達に見物の機会を与えたことは、的を得たことと私は評価しています。市民の実状をあちこち聞いた話から推定しますと、博覧会初〜中期には無関心な家庭も多く、後半期になるまで博覧会に行かなかった市民がかなりあったようです。たいがいは終わり近くなって、大混雑の中を見に言った市民が多く、そうなると見物どころでは無かっただろうと想像されます。

私的なことになりますが、我家では私を除いた家族で各会場３回程度は出掛けています。私の子供は小学生の女の子ですが、かなり真剣に宇宙に行くことを考えており、この子供にとって、ミールへの試乗やボイジャーとの出会いは大変大きな感動であったようでした。ややもすれば家庭から行く事のない子供を含めて、子供達に比較的空いた時期に見る機会を与えようとした主催者・行政の姿勢は評価されるべきだろうと思います。博覧会とは本来こうした見物人に無限の感動を与える意味も持っている機会です。実態的な評価や文明史的な評論もなく、東京であれ地元であれ表面的な事像ばかりをとり上げていたマスコミの報道姿勢には疑問と言うより批判をしたいと思っています。　（おぜき　としかつ）

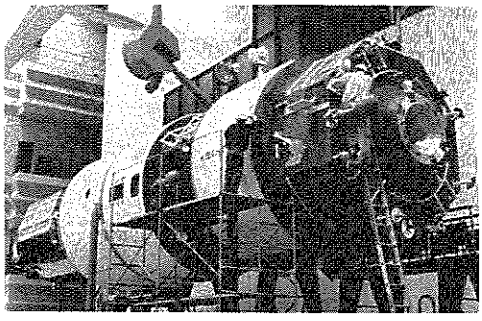
デザイン博　白鳥会場



デザイン博　外国館、展示が好評だった



デザイン博　テーマ館の展示、ソ連宇宙船シール号



妄想の博物館（下）
通りすがりのブラジリア

糸乗　貞喜

自然発生都市と計画都市

ブラジリアの人口は200万人で（その中に日系家族が2,300あるということだった）、そのうち35万人が中心都市、つまり飛行機の形をした都市とその周辺に住み、他はおおむね20万人ぐらいの衛星都市に住んでいる。日本でうわさ話として聞いていた話では、計画された中心都市は非人間的で全くつまらないところであって、人間的な街は、ブラジリア建設の為に自然発生的にできたところである、というものであった。もちろんそこにはスラムもあるが、魅力的な街であるということであった。ガイド氏にこのことを告げて、「行ってみたいが時間はあるか」と尋ねてみた、「近い衛星都市は20キロぐらいですから行ってみましょう」ということでスラム都市を見にいった。

通りすがりの通過人間である私に発言権はないと思うが、そんなにひどい街ではなかったし、人間的な街という気もしなかった。たしかにスラムはあったが再開発中であり、レンガの住宅などに建替えられつつあった。また街の一角にブラジリア最古のホテルだという「ホテルリオデジャネイロ」という建物があった。まだ現役のようであったが、その部屋は窓もないようなものでベッドがポツンとあるだけだった。廊下というか土間の一偶にシャワーがあった。

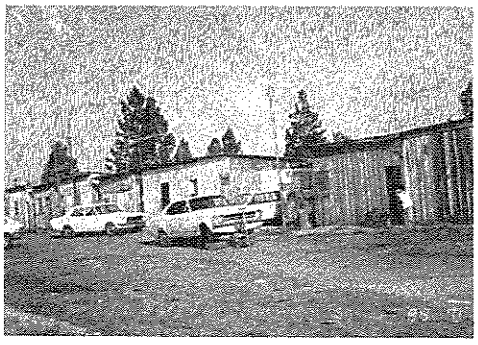
少なくともこの街は中心部も周辺部も普通の街であり、広い道路が整然と通っており、ボロ家が軒を接して迷路ように拡がる……というようなイメージではない。サンパウロの郊外にあるスラムの方がそんなイメージに近いのではないか。

私は少々ガッカリした。これなら少々人間的スケールからはずれる点はあるものの、はるかに中心都市の方が魅力的である。

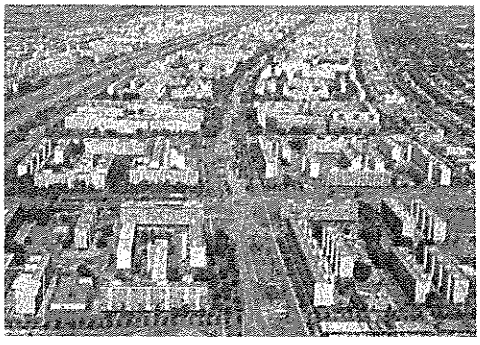
人間の妄想の結晶ブラジリア

ブラジリアの魅力は、結局のところ人工的都市の魅力である。しばしば私たちは「自然ほどすばらしいものはない」、「人間がいらんことを考えなかったらもっとよい環境に……」などと言ったりする。これは日本人が自然に近づいて生活しているための自然礼讃かもしれないが、人間が内部に介在するかぎり、自然に放置したということは、無知の堆積以

衛星都市のスラム街



ブラジリアの中心からサウスウィングを見る



外の何ものでもないと思う。

本来プランというものは、自然をできるだけ会得した人間の工夫（つまり人工）のことを意味するのであろう。人工のない単に放置されたまま膨張した都市なんて住めたものではないと思う。人間の知恵がプラニングの原点であり、それは主観的〝思い〟であり情念である。

クールな日常になれているわれわれからみると、ブラジリアの街は、もはや〝思い〟などというなまやさしいものではなく〝妄想〟とでもいうべきもののように思える、「なぜブラジリア駅と政府などの三権広場を対偶においたのか」、「鉄道駅と行政中心をなぜ11キロも離したのか」、「なぜ飛行機の形にしたのか」、「なぜ議会の上院はお椀を伏せたような形なのか」、「下院はなぜその逆なのか」、「国立劇場の形はなぜこうなのか」、「カテドラルはなぜ……」、「なぜ、なぜ、なぜ……」

こうして見廻っているとクビチエック大統領、ルシオ・コスタ、オスカール・ニーマイヤーのエネルギが伝わって来る。彼らの妄想がぶつかり会ってブラジリアの形が結晶したのだということがなんとなく納得できてくる。妄想こそがプラニングのエネルギであり、その妄想が熟成されたものが優れたプランということになるのであろう。

ブラジリアを廻っていると、自分のしているプラニングに、これだけの思い、情念、妄想をたたきつけていないということに対する不安感がよぎってくる。

太陽と人間

ここまで書いてきて、この設計の軸のすえ方が太陽の真南とずれていることの理由に気がついた。ひよっとすると当っているかもしれない。

そもそも太陽を日常の暮しの中で恩恵と感じるのは寒い国の人たちかもしれない。少なくとも緯度の高い国か高地の人々であろう。ブラジリアに行く前にアマゾン河中流域に足をのばしたが、南緯1度のところでは、年中32～33度ぐらいで、湿気はないから暮しやすいとは言え、彼岸の中日（春・秋分の日）を感じたら、太陽の恵みを感じるような気分はなく、太陽はあり余っているように見えた。南緯16度のブラジリアも乾期、雨期以外はなく、太陽もあふれていた。

もともと太陽の方位を都市づくりの核にすえるという思想は熱帯の発想ではないのであろう。乾期の太陽とのたたかいが、人間の生存の条件かもしれない。

さきに自然発生都市と計画都市についてふれたが、われわれが〝自然〟というと、それは「人間以外の環境」をさしているように思う。ところが昔は〝じねん（自然）〟という言葉が使われている。ここには人間も共存しているトータルな環境を意味していたように思う。「じねんのことわり」とか「おのずからしからしむるところ」などという意味には人間を含む世界が語られている。

もしかすると、自然をもっとおそれていた頃は〝じねん〟であったものが、怖れを失っていく中でヨーロッパ的な〝しぜん〟に変ってきているのかもしれない。これもブラジリアに触発された私の妄想である。

ブラジリアにもう一度行ってみたい。もう少しゆっくり妄想に触りながら廻ってみたい都市である。ついでに書き加えると、大阪から成田――サンパウロまでと、ブラジル国内のフリーパスを合わせて40万円弱であった。案外安い旅費であった。滞在費は1日1万円もいるはずがない。もう一度アマゾンにも行ってみたい。（いとのりさだよし、じねんプラン代表、九州地域計画研究所々長、地域計画建築研究所相談役）

（いとのり　さだより）

伏見港物語
京都らしいウォーターフロント

山田　泰造

はじめに

港でもないのになぜ伏見港なのか。たしかにもう40年近く船の影も見なくなり、古風な閘門、5,000㎡ほどの水面とその水辺、そして流水する小河川という光景からはここに港があったのかと不思議に思われるのも無理からぬことと思います。

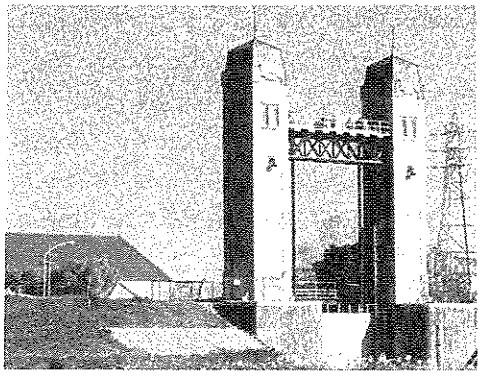
実はこの辺り、昔は伏見の浜と呼ばれ、伏見桃山城が築かれた頃から約400年、港湾都市として大いに栄えたといいます。京都府が伏見港開港400年にあたる平成6年を目標に、伏見港の再生により地域の活性化を図るための事業を実施している様子を各新聞が大きく報道しました。ちょうどいい機会と思い伏見港の歴史を振返って見ることとします。

伏見港の消長

伏見港は時代の流れにその都度大きくゆれ動かされ、繁栄と衰退の歴史を繰返してきました。

(1)　1590年代……秀吉が伏見城を築城するにあたり宇治川の大規模な改修を行い、大阪との水運の拠点として伏見に港をつくりました。

伏見港の名残り　閘門



(2)　江戸期……徳川幕府の行った参勤交替制により西国大名たちは必ず伏見に立寄ることとなり、大名屋敷、本陣、問屋、旅館が生れ舟運・陸運の中心となりました。人口は4万人、金沢や福井という城下町をはるかに凌ぐ大都市として、また日本最大の内陸港湾都市として栄えました。世に名高い30石船、50石船、200石船、高瀬船など荷船、旅客船は享保年間（1700年頃）には1,700隻を数えたといわれています。また歴史的に忘れてならないのは1614年角倉了以が京都市内から伏見にいたる水路、高瀬川を開削し、大阪への水運を可能にしたことです。

(3)　明治期……明治10年、神戸・京都間に鉄道が開通したため大打撃をうけましたが、23年琵琶湖疏水が開削、27年9月鴨川東側にできた鴨川疏水が濠川と連結し、大津から伏見港までの水運が可能となりました。日本海側から関西方面への海産物や、京都・伏見で使用する石炭などが殆んど舟運で賄われました。しかし鉄道・道路の発達という時の流れには抗するすべもなく名物の「外車船川蒸気」は発動機曳船と変り、客船は皆無となりました。

(4)　大正・昭和中期……大正6年大洪水があり、大正7年から昭和7年にかけて淀川改修増補工事が実施され、今日見られるような平戸樋門、三栖閘門、新高瀬川が相次いで建設されました。昭和16年には内務省による伏見港修築計画が、22年舟溜りの整備、28年2月地方港湾の指定、管理者は京都府、区域は京都市内淀川本流と阿波橋・平戸樋門・三栖洗堰・三栖閘門に囲まれた水面と決りました。

30年代に入って港は遂に利用皆無という状態となり、泊地は家庭雑排水・工場排水の流入による水質悪化、悪臭、さらに台風ごとに起る内水排除問題としだいに環境は悪化し、地域住民からは改善について強い要望が出されました。京都府は38年泊地の埋立を決定、43年には遂に外部施設、臨港道路、物揚場、倉庫等を残すのみとなり、伏見港は事実上港湾としての機能を失ったのであります。

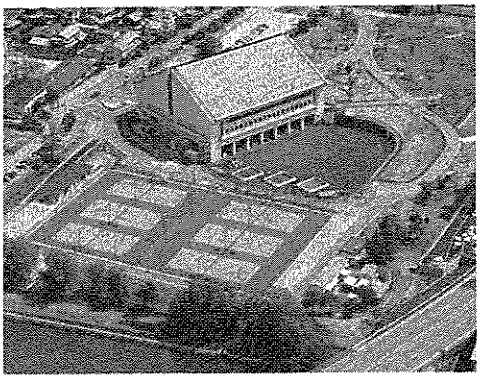
伏見港再生への道

(1) 昭和の贈物……伏見港は今後どうなるのか、地元の人々は熱い思いで京都府の出方を見守っていました。現伏見港公園協力会長堀堅二氏は「最初は府営住宅ということでありましたが、私共地元民の気持はこの地域のイメージ・チェンジを図らねばならぬ。そのためにはどうしても文化的施設かスポーツ施設をという思いでした。府も誠意をもって応えてくれました。」と。43年37,000㎡の広さの伏見港公園が、大小二つの子供用プールを中心施設として誕生しました。夏休の期間、1日6～7,000人、合計7～8万人の入場者があったのですが、夏の成功が大きかっただけに、年中、冬でも雨でも利用できるスポーツ施設をという願いがしだいに大きくふくらんでいきました。京都府も南部地域のスポーツ施設増強を検討しているところでしたので、地元要望に応える形で53年着工、57年6月には4万㎡の全く面目を一新した公園が出現しました。伏見の酒蔵をモチーフにしたデザインの体育館は、太陽熱利用の温水プールを併置し、人々の注視の的となりました。立地条件の良さと施設の使いやすさから利用者が殺到し、最近3カ年の平均でプール約28万人、全施設では40万人の利用客にのぼりました。堀氏は「お住いは？ああ、あの伏見港公園のところですかと言われ、全く鼻高々です」と地元が意図したとおりに変貌した伏見港一帯に大きな満足感をもっています。

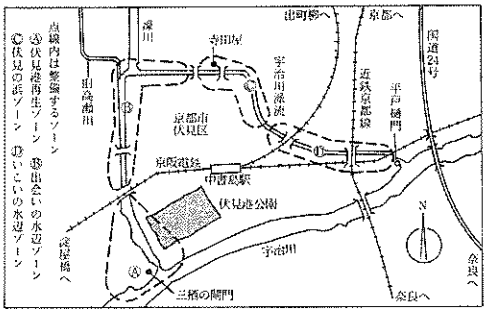
(2) 平成のトライアル

三栖閘門から平戸樋門までの約2.5㎞の水面は港湾地区の指定をうけており、宇治川派流と呼ばれ、従来から河川敷は毎年整備され

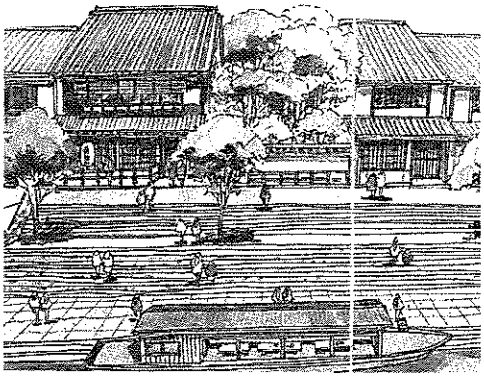
伏見港公園の現在



伏見港の再生計画



寺田屋前のイメージ図



てきました。この区間を「みなとまち伏見の歴史的再生」「親水性あふれる水辺空間の整備」をはかる舞台にして、昔の面影をよみがえらせ、人々の生活の中に水を取入れようとしています。

秀吉が、西国大名が、角倉了以が、坂本龍馬が、田辺朔郎がこの水辺を闊歩し、死闘を演じて日本の歴史を大きく回転させてきました。この計画を知ったとき私の胸は大きなときめきを感じました。この計画はいかにも京都らしい計画といえましょう。ウォーターフロント開発とか、ベイエリア問題にかける期待の大きさはただならぬものがありますが、また「豊さの実感」をどう実現するかということもゆるがせにできぬ問題としてクローズアップしてきました。従来の経済効率一辺倒から、すこしばかり方向を修正し、ゆとりのある人生のために必要な条件を一つ一つ具現してゆくことが大切かと思います。伏見港再生の平成のトライアルはこの課題に答える一つの処方箋かと思い、この「あまりに京都的な」ウォーターフロントの実現に大きな期待をもっています。

（やまだ　たいぞう）

大阪事務所ＯＡ化奮闘記

松尾　光洋

ワープロ専用機時代

私が入社した1985年当時、ＯＡ化と言えば一般にはワープロ導入のことでした。パソコンは、ビジネス用のソフトウェアがまだ充実していなかったからです。

大阪事務所は、すでにシャープのワープロ専用機「書院」とソード製パソコンを１台ずつ導入していました。ソードのパソコンは、表計算ソフトが優秀でしたが、それ以外のソフトは貧弱でした。したがって、所内でもユーザーは少なく15人の所員のうち、３人だけでしたが、この３人はかなりパソコンを駆使して業務を進めていました。

一方、書院のほうは絶大なる人気がありました。当時のワープロの使い方は、報告書の清書です。もともと、アルバイトが手書きで清書していたのをワープロに切り替えたにすぎません。したがって、ワープロを打つのはアルバイトが主でした。やがて、所員もワープロを使って自分で清書をするようになると、機械の取り合いが生じてきました。さらに、ソード機にはワープロソフトがなく、ワープロ機増設の要望は頂点に達しつつありました。

議論を重ねた結果、あくまでもワープロ機の代用として、新しくパソコンを導入することになりました。1985年10月のことです。機種はＮＥＣのＰＣ 9801シリーズ、いわゆる98（キューハチ）でした。ようやく実用に耐えるワープロソフトが出始めたからです。ソフトは「一太郎」を選びました。所員の中には、ＮＥＣのパソコンの名前と勘違いしている人もいました。それほど、当時としてはワープロ機能そのものがＯＡ化の代表だったのです。

実はこの機種選定の裏には、大いなる目論見があったのです。将来的にはワープロ機はやめて、すべてパソコンに切り替え、ワープロソフトだけでなく、表計算や図形などのソフトを駆使して報告書を作成する、いわゆるＤＴＰ（デスク・トップ・パブリッシング）と、文書データを始めとするあらゆる所内デ

ータの統合化を図る所内データベース構想が密やかに考えられていました。

ワープロ機ユーザー多数時代

書院派にとって、パソコンの導入はほとんどメリットがありませんでした。書院と一太郎はコマンド体系が異なり、そもそもキーボードに日本語表示がないのが扱いにくいということで、書院から一太郎に乗り換える人はほとんどいませんでした。

しかし、従来からのパソコンユーザーは一太郎を使うようになったので、書院ユーザーは実質的に減少し、ワープロ需要はほぼ満たされるかたちになったのです。

やがて日常の打ち合せ用の資料もワープロで打つようになると、２台の機械では需要が満たされなくなり、1986年１月には「もう１台書院を」という声が大きくなりました。費用／性能比では、パソコンが有利ですが、機能的には一太郎より優れた書院に慣れ親しんだユーザーは「９８」の導入を認めず、1986年４月、ついにパソコン派が折れて、書院の増設となりました。

一方、パソコンの需要は徐々に拡大しつつありました。パソコン本来の計算機能を重視した表計算やアンケート集計などを中心に利用者が増加し始めたのです。こうして、1986年10月、２台目の９８が導入され、９８と書院の台数の上で互角になり、一見パソコン機とワープロ機が共存しているかのように見えましたが、ユーザーはまだ書院派が多数を占めていました。

ワープロとパソコンの併用時代

1987年３月、３台目、４台目の書院が導入されました。年度末のワープロ需要を乗り切るためでした。このうち１台はポータブル型でした。

このときも、やはりパソコンの導入を考えていましたが、書院派が既存文書との互換性を盾に、９８導入に首を縦に振らず、やむなく導入した機種でした。この１台の追加により、文書データ統合の実現は決定的に遅れる結果となりました。

書院の台数が増れるなか、パソコン派は周辺機器を充実することで作業環境を整えてました。ハードディスクなど高速記録メディアをそろえたり、様々なソフトを購入あるいは開発していました。このころ、所内ではパソコンゲームが流行りました。少しでもパソコンに慣れてもらうと意図もありました。

1987年６月、満を期して３台目のパソコンが導入されました。エプソン製の９８互換機（いわゆる２８６）です。いままでの９８に比べて実感で倍ほど処理速度が速いのが魅力でした。この機種の導入により、ワープロ機とパソコンはほぼ均衡を保ちつつそのユーザーもほぼ同数に達するようになりました。

パソコン隆盛期

エプソン機の導入前後、９８のソフトは続々とバージョンアップ（改訂）版が出始め、ワープロ機能も書院と遜色がなくなりました。パソコンの処理速度が向上する一方、プリンタも進化し、より速くより静かに印字するインクジェット・プリンタの導入はユーザー獲得に効果的でした。また、パソコン通信をし始めたのもこのころです。このような状況下でパソコンを使う人が増え始めました。アルバイトが一太郎を使いこなすようになると、パソコンの需要は一気に高まり、1988年３月、年度末需要を乗り切るためパソコンが１台追加されました。さらに、同年４月にはラップトップ（可搬）機が導入されました。従来のデスクトップ（据置）機では、設置場所がなくなったためです。

このラップトップの導入により、パソコンの位置づけは決定的となり、書院派の声を押し切るように同年７月にはさらにもう１台のラップトップ機が追加されています。同時に、プリンタにはレーザープリンタが導入され、印字の高速化、高品質化を実現しました。

その後、パソコンは半年に１回の割合で導

入され、現在では、５台のデスクトップと６台のラップトップがあります。当初の目論見のＤＴＰや所内データベースはまだ実現できていませんが、ワープロや表計算、グラフ作成、アンケート集計などでフル稼働し、機械の取り合いやプリンタの順番待ちも珍しくありません。

一方、書院のユーザーは1989年頃から急速に少なくなり、４台の書院のうち２台はほとんど使われていない状態です。

次世代のパソコン導入に向けて

現在のパソコンは、軽量コンパクト化と大量データ高速処理が同時進行しています。またデータやソフトの互換性を重視され始めました。そのうち、パソコンも、電卓のように手軽に扱れる事務機器となることでしょう。

しかし、道具が進化してもそれを使用する人の考え方が変わらないと新しいことは生まれてきません。新しい道具には、それに似合った新しい感性が必要かと思われます。

新しい道具にすぐに慣れるのは常に若い人材です。今後開発される次世代のパソコンは、これから新しく入社する若い感性にその使い方を任せるのが得策と言えそうです。

（まつお　みつひろ）

きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

のり面開発の動き
ー地価高騰の影響出始める ー

重本　幸彦

首都圏で始まった地価高騰が大阪圏へも飛火しており、まちづくりへの様々な影響が予想されるが、既に一部の地区で緑地系での土地利用がほぼ確定しているかにみられていた住宅地ののり面を、再度、開発して宅地化するなどの動きが出始めている。

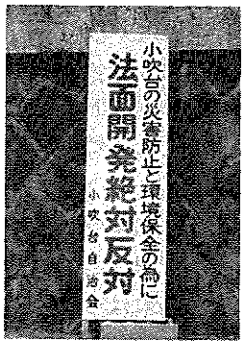
兵庫県川西市は大阪都心から１時間以内にある近郊住宅地で高度成長期に市街化がほぼ完了した地域。この町の一角では、住宅地の真中に残されたのり面の一部が、ほぼ垂直に掘削されコンクリート壁で区切られて、数区画の宅地に変わりつつある。もちろん、防災面には十分配慮して行うのだろうが、地価高騰の結果、従来以上に防災・造成工事費をかけても採算が合い出したことを物語っている（写真①）。

一方、大阪府南河内郡千早赤阪村は、やはり、大阪都心から１時間余であるが、ここの住宅団地ののり面が宅地開発されようとしている。のり面を新らたに盛土したり、人工地盤を作ったり（写真②）、何か所かが問題となっている。前から住んでいる団地住民は反対しているが、十分な防災工事をすれば、認められるだろう（写真③④）。住宅団地開発

①　住宅地内ののり面にコンクリート壁を立てて、宅地を造成中（川西市萩原）

②　住宅団地ののり面に作られたコンクリート製人工地盤（千早赤阪村小吹台）

③　以前から盛土によるのり面開発の動きはあったようだ（小吹台）



④　人工地盤区画の前のたれ幕（小吹台）

（写真はいずれも２月中旬に撮影）

後、のり面が行政へ移管されず、ディベロッパー所有地のままだったために生じた現象である。なお、同村は都市計画区域外で、市街化調整区域が設定されていないので、周囲の山地での同様の開発が危惧される。

これからは、地価高騰により、こうした「のり面の再造成」という現象以外にも、従来の社会通念をこえた開発が、いろいろ出現する可能性がある。

（しげもと　さちひこ）

“Most Livable City”の意味するもの
―ピッツバーグを訪ねて（その２）―

畑中　直樹

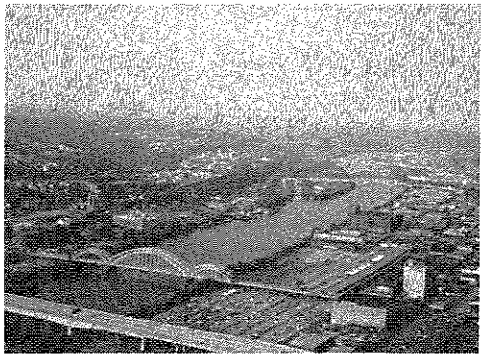
空港に着いてシャトルバス乗り場の方に歩き始めて最初に目に飛び込んできたのは、“Welcome to Most Livable City in United States（ようこそ、アメリカ合衆国で最も住みやすいまちへ）”というスローガンでした。空港に着くなり空からの来訪者をあっと驚かすこのスローガンに、ピッツバーグ市民のピッツバーグに対する誇りと深い愛着を感じました。

ピッツバーグは、緑の多いまちです。ゴールデントライアングル（都心地域）には、川沿いに広い公園があり、周囲の丘陵もうまく斜面の緑が残され調和が保たれています。

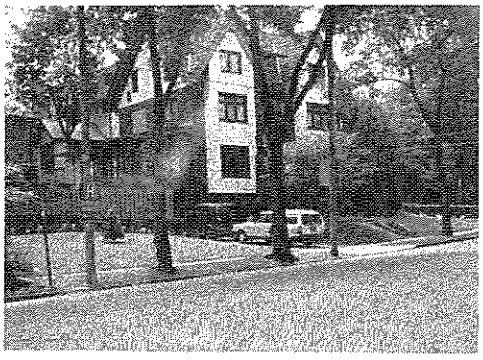
ピッツバーグの市民生活を快適にしているのは、こうしたまちの美しさだけではなく、犯罪が少ないこと、物価が安いこと、住宅が安いことなどがあります。

ピッツバーグには、いわゆるスラムとかブライテッドエリアといわれる、都市計画の上でも社会福祉の面からも深刻な問題を抱えた

緑の多い市街地――斜面緑地の保全



車でダウンタウンから10分ぐらいの住宅地



地域はほとんど無く、この点は、ニューヨーク、ロスアンゼルス、デトロイト、シカゴなどとは好対照です。

また、住宅の安さとこれら住宅地のアメニティの高さも日本とはかけ離れています。ピッツバーグの都心から車で10～15分の緑多い郊外にある、敷地が150～200坪の一戸建て住宅が約8～10万ドル（1ドル140円として1,100～1,400万円）という安さです。

ピッツバーグの“Most Livable”が意味するものは、私たちが豊かさを実感として感じるための大きなヒントになるようです。

最後に、『ピッツバーグ生活に関する事実～なぜ、芝生の緑がより濃いのか、なぜ、空がより青いのかについての101の理由～」と題するパンフレットに書かれた第1の理由を紹介して終わりたいと思います。

“Pittsburgh's image of a smoky city has gone up in smoke”

（はたなか　なおき）

國境（くにざかい）（美濃と近江）談義から…

真野　峰行

先日、近江と美濃の國境のまちを訪れる機会がありました。現在の地名で言うと、近江の東端は滋賀県坂田郡山東町周辺、美濃の西端は岐阜県不破郡関ケ原町周辺です。この付近は、昔は中山道などの旧街道が通り、現在では東海道新幹線や名神高速道路の通る交通の要衝です。

有名な國境というと箱根の様な大きな峠を連想されるかも知れませんが、実際には東海道本線が、トンネルを掘らなくても直進できるほどの勾配しか無く、知らない間に隣の國へ行けてしまうのです。この辺りが大昔には京都の入り口（近江）と東（あずま）（東夷）との境だったとは思いにくいところです。

こんな國境に、「寝物語」という話が残っています。昔、近江の宿に泊まっていた人と、美濃の宿に泊まっていた人が、宿の壁越しに寝ながら隣國の話ができたというのです。今でも、山東町長久寺と関ケ原町今須の境には幅20～30㎝の溝が残っていますが、その溝が埋められているところには、壁を接するように民家が並んで建っています。子供でも一歩で行けるような隣の家が他県であり、昔は違う國だったのかと思うと不思議な感覚です。

現在での國境の意味はどうかと思い、地元の人に色々聞いてみました。関西では「バカ」のことを「アホ」と言いますが、山東でも関ケ原でもバカのことは「タワケ」（これはおそらく名古屋弁だと思います。）と言うそうです。また、両町とも雑煮の餅は角餅だそうです。ただし、テレビの天気予報は全く違うエリア（近畿と東海）を対象としているとのことです。おそらく、近江の東端の人は西に、美濃の東端の人は東にアンテナ（目）を向けているのでしょう。「寝物語」の話は山東でも関ケ原でも知られているのに、なぜか、これらの共通点や相違点を地元の人はあまりよくは知らないようです。

こんな國境のまちを訪れてみて、最近よく言われる「交流」とか「情報ネットワーク」という言葉の意味するものとは何なのかと考えさせられる今日この頃です。

（まの　みねゆき）

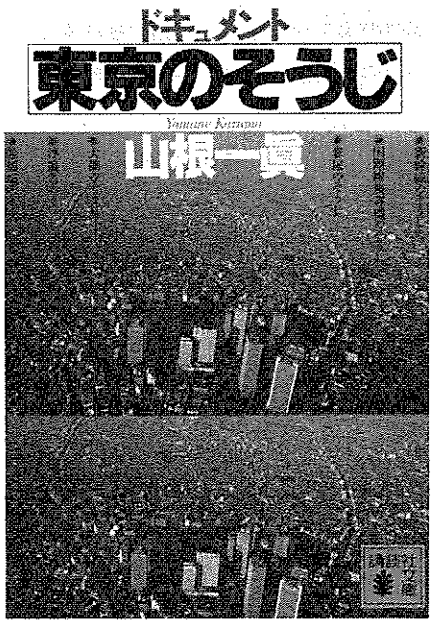
この細い溝が国境ということです

新刊旧刊書評紹介

講談社文庫
山根一眞著

「ドキュメント 東京のそうじ」

紹介　藤田　武彦



この本は「東京のそうじ」というタイトルになっているが、著者があとがきでもかいているように、「取材をつづけるうちに、そういう人々ー（そうじをしている人：筆者）の心温まる日々を描くことに関心が移っていった」ものとなっている。

実はこの「心温まる」というのが問題で、なかなか笑うに笑えない、温まろうにも温まりきれない現実も出てくる。

ドキュメントは、6つの章でできている。

第1章　新幹線のそうじ
第2章　国際線旅客機のそうじ
第3章　糞尿のそうじ
第4章　犬猫のそうじ
第5章　浮浪者のそうじ
第6章　競馬場のそうじ

新幹線のそうじは、約60人のおじさん、おばさんが約20分で完了し、東京駅では毎日20kgの布袋で350～500個のゴミを出す。また、国際線（羽田）旅客機内のそうじは約30分で、前の客の痕跡をあとかたもなく消すためにやっているとか、東京でも年間62万tの糞尿を収集し、そのうち59t農地に還元しているが残りは海洋投棄しており、バキュームカーでの収集は一軒あたり2分ぐらいという神技が演じられているといったように、実に数字に明るい。しかも、バキュームカーでの糞尿収集の「臭いは30m離れたところが一番きつくなる」とか記述も細かい。

はじめに述べたように著者は、ゴミの処理システムをルポしようとしたらしいが、やっていくうちに、円滑なシステム進行には、「おじさん」「おばさん」の何ともいえない熟練さがついてまわっていることに感動されたようである。このことは、計画づくりをするにあたって私達もよく経験することでもある。

思えばシステムとはおかしなもので、表面的にみれば、だれが働いても同じように動くように思いがちだが、現場ではものすごい熟練がつまれてくるのが通常である。ということは、社会的要請の変化も多分にあるのだろうが、かなり現場の人が工夫して成り立つようにセットされている。しかし、現場に大きな工夫を期待しすぎると破綻するし、さりとて成長しないシステムなど現実的ではない。システムの提案とはむずかしいものだなあと改めて考えさせられる。これはシステムと現場の関係という視点でみてもおもしろいし、人間の生き方という面でみてもおもしろい本であった。

（ふじた　たけひこ）

まちかど

“さんた”と“しょうた”

山崎　美加

以前、九州事務所の隣にある水鏡天満宮が「都会のオアシス」として紹介されましたが、今回その天満宮に住む2匹の犬を取り上げます。

天神のどまんなかに住むこの犬たちは、名前が“さんた”と“しょうた”、ともにオスです。彼らは、目の前にある広々とした県庁跡地での散歩を日課としていますが、そこへ行くためには4車線、しかも車がひっきりなしに走っている幹線道路を越えなければならないのです。

普通の犬だったら？車の合間を縫いながらクラクションの攻撃にあうか、偶然の青信号を渡るでしょう。しかし、“さんた”と“しょうた”は信号を待つのです。それもきちんと“おすわり”をして。

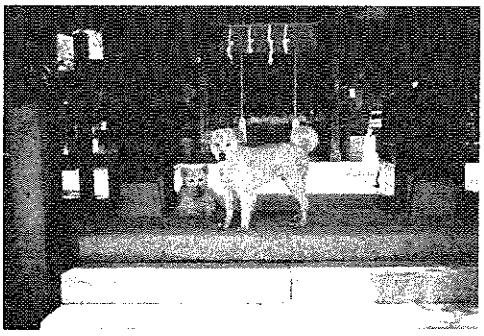
水鏡天満宮のおばさんの話によると、天満宮横丁の飲食店で飼われていた“しょうた”が、引っ越し先から仲の良かった天満宮の“さんた”のところに戻ってきたそうです。

そして“さんた”が、今は年老いて左目の見えなくなった“しょうた”を毎日2回散歩に連れていってあげるそうです。

さて、幹線道路の信号が赤に変わると、一方向の車が止まります。彼らはそこでまず時間差の信号にだまされ腰をあげますが、人間の動きをみて歩き出すのをやめます。そして完全に横断歩道が青に変わってからゆっくり渡りだすのです。“さんた”はちょっとヨタヨタしている“しょうた”をちゃんとかばいながら県庁跡地を目指します。“しょうた”が恐がって渡れないときには“さんた”ももう一回信号を待ちます。一緒に渡る人たちは彼らの行方を見守り、車の中の視線も集中します。時間に追われてバタバタしている人間たちがふと我にかえる瞬間です。都会のあわただしさの中で人間たちが忘れてしまっているゆとりとやさしさを、この2匹の犬が思い出させてくれます。

（やまざき　みか）

“さんた（右）”と“しょうた”



アルパック　㈱地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社 京都事務所	〒600	京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82 （大和銀行京都ビル8階）	TEL（075）221−5132（代） FAX（075）256−1764
大阪事務所	〒540	大阪市中央区石町1丁目1番1号 （天満橋千代田ビル2号館9階）	TEL（06）942−5732（代） FAX（06）941−7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 （ツボウチビル2階）	TEL（052）962−1224（代） FAX（052）962−1225
東京事務所	〒402	東京都港区芝大門2−3−14 （一松ビル1号館402）	TEL（03）437−3405（代） FAX（03）437−3407
九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 （日之出ビル6階）	TEL（092）731−7671（代） FAX（092）731−7673
㈱アルパックインターナショナル	〒540	大阪市中央区石町1丁目1番1号 （天満橋千代田ビル2号館6階）	TEL（06）943−7016 FAX（06）943−7026
㈱都市居住文化研究所	〒604	京都市中京区御池通東洞院東南角 （京ビル4階）	TEL（075）252−2231 FAX（075）252−2282